たくみ

TAKUMI

No.038
平成28年6月●夏号
信州名匠会

（題字：故 池田三四 前名誉会長）

訃報　宮本忠長名誉会長がご逝去

2月25日　近親者に見守られ88年の生涯を閉じる

宮本忠長氏

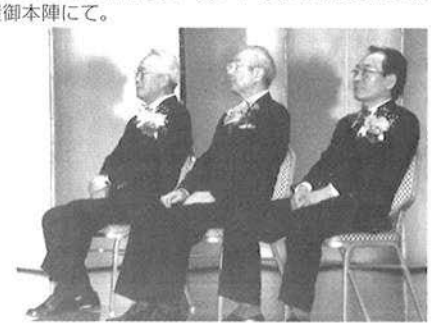
宮本忠長名誉会長は、信州名匠会の生みの親であり、育ての親でもあり、信州名匠会にとってなくてはならない存在でした。日本建築学会作品賞を受賞した「長野市立博物館」をはじめ、宮本作品が、技術を持つ職人たちと一緒に仕事をする姿勢に支えられていることに着目した初代信州名匠会会長 村松貞次郎先生のご助言により、長野県内の職人さんを「ものをつくる」という共通項で集めて、お互いに研鑽する場をつくる目的で信州名匠会が生まれました。設立総会は平成5 年4 月、長野市にて開かれました。

以来、会員・顧問のみなさまに支えられ、今年第24 回の通常総会を迎えます。職人を大切に思い、職人と共に全力で作品を生み出した宮本名誉会長。そして、それを慕って集まった職人たち。この絆を大切にして、この会に対して故人が抱いた目的・意義をもう一度肝に銘じ、会員めいめいが協力し合い、活躍できるように、研鑽・精進していきたいと思います。

最後まで信州名匠会の会員（職人）に敬意を払い、真摯に接してくださった宮本名誉会長に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

設立総会であいさつする宮本忠長氏。正面左は、故・池田三四郎名誉会長。平成5年4月6日、長野市の藤屋御本陣にて。

信州名匠会・故宮本会長追悼研修会での出席者集合写真。平成28年5月30日、宮本忠長建築設計事務所「緑艸舎」2 階広間にて。


「全税共地域文化賞」贈呈式で、故・村松貞次郎初代会長（左）と。平成8 年4 月19 日、帝国ホテル「富士の間」にて。（写真提供：日刊建設工業新聞社）

◎略歴

宮本　忠長（みやもと　ただなが）

昭和02年　長野県須坂市に生まれる（本籍／長野県須坂市大字須坂529番地）
昭和26年　早稲田大学 理工学部建築学科（工業経営）卒業<旧制>
昭和26年　早稲田大学教授　建築家 佐藤武夫設計事務所 入所（14年間勤務）
昭和34年　一級建築士資格取得（第29154号）
昭和39年　宮本忠長建築設計事務所 設立
昭和41年　株式会社 宮本忠長建築設計事務所（長野市）と改組、
　　代表取締役所長に就任
平成02年　小布施町景観デザイン委員会　委員長
平成08年　長野市都市景観審議会　副会長
平成14年　社団法人 日本建築士会連合会 会長（～平成20年、～名誉会長）
平成14年　社団法人 日本建築家協会 名誉会員
平成19年　社団法人 日本建築学会 名誉会員
平成22年　代表取締役会長に就任

長野市庁舎設計当時の宮本忠長氏

リンゴ畑でくつろぐ宮本氏

◎表彰等

平成03年　建設大臣表彰（建設事業関係功労）
平成04年　長野県知事表彰（産業功労）
平成05年　黄綬褒章 受章（建設振興功労）
平成15年　長野市功労表彰
平成16年　第60回 日本芸術院賞 受賞（松本市美術館の設計）
平成16年　平成16年度 第11回 信毎賞
平成16年　旭日中綬章 受章（建築設計監理業振興功労）
平成28年　叙位正五位

小布施町の「かんてんぱぱショップ」竣工式にて

◎著書

昭和55年　「寒冷地の工法」　井上書院
平成03年　「住まいの十二か月」　彰国社
平成15年　「森の美術館」（村井修氏と共著）　中央公論事業出版

◎主要作品

<作品名>	<所在地>	<受賞歴>
長野市立博物館	長野県長野市	・昭和56年度 日本建築学会賞　第二部（作品） ・建設省公共建築百選 入賞 他 ・日本建築家協会 JIA25年賞
小布施町並修景計画	長野県上高井郡 小布施町	・第12回 吉田五十八賞 建築部門 佳作
小布施まちづくり整備計画	長野県上高井郡 小布施町	・第32回 毎日芸術賞、 第11回信毎賞 他 ・2006年土木学会 景観・ デザイン賞 最優秀賞
騰々亭（広島銀行迎賓館）	広島県佐伯郡大野町	
信州高遠美術館	長野県伊那市	第6回 公共建築賞 優秀賞

小布施町並み修景事業「栗の小径」

ケアポートみまき	長野県東御市	日本医療福祉建築賞1996
森鴎外記念館	島根県鹿足郡 津和野町	第3回 しまね景観賞 一般建築物部門優秀賞 建設省公共建築百選 入賞
国民宿舎 サンライズ九十九里	千葉県山武郡 九十九里町	
北九州市立松本清張記念館	福岡県北九州市	第41回 財団法人 建築業協会賞
小林古径邸復原事業	新潟県上越市	
松本市美術館	長野県松本市	第44回 財団法人 建築業協会賞 第60回 日本芸術院賞

松本清張記念館

松本市美術館

建築家　宮本忠長先生の活動の意味とその継承

信州名匠会会長・信州大学工学部　**土本　俊和**

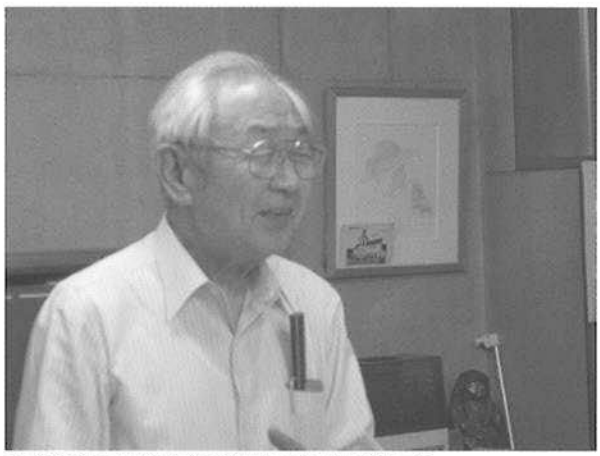
私が東京で建築を学んでいた1980年代、都心を活動の拠点として全国を股にかけて活躍する建築家が目立っていました。そのような中、1980年代の後半に、小布施町が建築関係の雑誌で紹介され、長野市立博物館が日本建築学会賞を受けました。その後、信州で実際に町や建物を見て、学生の胸に届いたのは、地域に根ざした建築活動がより深い内容を生むに至るということでした。

「地域に根ざした」というこの活動は、小布施のまちづくりのようにより綿密で持続的ないとなみを促す原動力であり、長野市立博物館のようにそれぞれの地域により善く適合した作品を生み出す原動力であったのでしょう。そればかりでなく、この活動は、人々のつながりを地域で育んでいくいとなみであったのです。

縁あって1993年の春に信州大学に赴任してから、建築設計製図第5の授業で、宮本忠長先生の薫陶を直に受ける機会に恵まれました。学生に対するやさしい眼差しから、若い人たちをゆっくりと育んでいこうとする姿勢がうかがわれました。また、その後も縁あって、信州名匠会の活動にも参加する機会に恵まれました。この活動にも、このまなざしと同様のまなざしがありました。

地域に根ざした活動とはいえ、この活動は、地域のみに閉じていたのではなかったのです。全国に、全世界に、メッセージが積極的に投げかけられていました。そのメッセージの核は、建築のよりよい姿が、個人の幸福を約束する、と同時に、みんなの幸福を約束する、というものであった、と理解することができるのではないでしょうか。特に建築に携わる者にとっては、建築のよりよい姿に積極的に関わっていくことが、自己実現への道程であり、自らとみんなの幸福につながる、というものであったと理解することができるのではないでしょうか。

個に根ざし、地域に根ざしながら、広く長く、世界のよりよい姿を見ようとする姿勢は、とりわけ若い人たちのこれからの生き方の指針になることでしょう。


平成18 年7月、研修会で会員に語りかける宮本氏

平成20年度信州名匠会総会にて。土本会長(左)と宮本名誉会長ほかのみなさん。

宮本忠長先生の想いを胸に

信州名匠会　副会長
株式会社降幡建築設計事務所　降幡　廣信

平成28年3月29日、宮本忠長先生のお別れの会は、私の心に深い感銘を残してくださった。その時のことが今も鮮明に心に残って、忘れられません。

それはお別れ会の会場に入って前に進み、惜別の想いで遺影の前に立ち、お顔を見上げるように拝した時の、先生の容姿から受けた印象です。そこには先生の心の気高さがあり、大きな心で先を見つめている鋭い眼差しがありました。

今日、稀な姿で地方に存在している信州名匠会も、先を見通す宮本先生の鋭さから生まれた会だったことを、改めて思い知らされたのでした。

私たちは宮本先生の想いを胸に、信州名匠会を大切に守って参らねばなりません。　合掌

平成20年度総会にて、宮本氏、青山氏（大工育成塾）と降幡氏

「長野市立博物館」を想う

信州名匠会　副会長・株式会社井内工務店　井内　猛男

長野市立博物館は、長野県長野市小島田町にある長野市立の博物館で、1981年（昭和56年）、今から35年前に開館した。宮本忠長氏が設計したこの建物は、同年の日本建築学会賞作品賞を受賞。また同年、建設省の公共建築百選にも選ばれている。

丸柱に出目地を飾った、型枠工事としては高度な技術を要した建築物として現在に至っている。

ここからの記述内容は、当時、この建物の型枠施工の職長であった故・五十嵐厚生氏より、当時の様子と現代との比較を語っていただいたことを、もとにしている。

五十嵐氏は当時、(株)井内工務店の社員であり、実際に現場の第一線で型枠を施工し、型枠大工を生涯の仕事として成し遂げた。

五十嵐職長曰く、宮本忠長建築設計事務所の方々は職人の話に耳を傾け、その話の中から当初の設計の主旨を補いながら、実際に型になるものに手を入れる職人と共に建物を造っていった。

この時の施工図は、施工図を渡されて読み取れない箇所を質問すると素直

長野市立博物館

に再作成され、設計事務所と「できる・できない」の施工面から打診していただき、実際に手が付けられるように詳細図を提示してくださった。

丸柱に出目地、そして上部の梁の交点については、今でこそCADがあるが、その当時は原寸を描き、設計図や施工図に出てこない寸法を、一つずつ出していったことが、懐かしく思い出される。

出目地についての当時の施工の様子

宮本忠長建築設計事務所の方々は、丸柱に出目地は本当に施工的に可能なのか心配であったようだ。今の設計事務所は、無理難題がわからず、図面ができたのだから施工できるだろうと勘違いをしてしまう、経験不足の設計者が多く、後々の問題が多い。作製した図面に対して施工者側の不具合が想定できない設計者も多いという現実がある。

しかし当時は施工前にかなりの時間をかけて用意周到の上、できるかできないかの検討を続けた。結局、「やろう!」という結論に達したが、やるからにはどのように進めていくか、様々な視点から知恵を出し合った。

結論は、心意気であった。

「出目地。そうか!　おもしろいからやろう!」

この意気込みの中、技術の集結に至った。

これこそ設計・施工者・職人の一体化の始まりであった。

35年前のこと、やはり情の中で1つの成果として完成に至ったことは事実である。

そして、当時の型枠大工そのものは造作大工から始まり、型枠も造作もできる大工として「カンナ」を巧みに使い、型枠そして曲げ物の加工ができる力と資質が備わっていたと実感している。

技術面としては、丸柱と出目地に対応するクシ型の加工から始まり、角ぐしにてセパレーターをとらない支保工を完成させた。階高もあり、よろび、通りも精度の確保はかなり厳しかった。

当時は、ラワンの厚いものが入手しやすく、このラワンの使用が治具として役立った。このラワンと厚12㎜のベニヤの仕口取り合い、付き合せ等はカンナを利用して技を尽くした。

夢を持ち、その夢を型にする

何もない空間から手解きしていくため、心身一体で汗をかき、体で覚えてこそ、設計から始まり、その意気を感じ、実際に技術が熟していく。

その昔、宮本忠長建築設計事務所の所員の方々は、コンクリートの打設時には一緒に汗を流して作業をしたとお聞きしている。型枠工事は、その「型」は、拾い～加工～現場の建方等、何日もかかって、コンクリート打設のたった一日に命をかける。

造作は造作大工だけで匠(たくみ)を成し遂げていくが、同じ大工でも型枠大工はコンクリート打設という異業種に委ねられることにこわさを感じるところもある。

この打放しの設計は、宮本忠長建築設計事務所の姿として今までも、そしてこれからもさらに卓越していくことと信ずる次第である。

長野市立博物館の竣工時、康志に携わった職人たちと。中央右に宮本忠長氏、宮本氏の右上に五十嵐厚生氏

信州名匠会と宮本先生

信州名匠会専務理事・坂田工業株式会社　坂田　守夫

宮本忠長先生から、ある日突然、電話をいただきました。「相談したいことがあるので、会いたい」とのこと。さっそく、先生の事務所にお伺いしました。

ご用件は、「匠(たくみ)の会をつくりたい」というものでした。「匠の技術を、今後とも育てていきたい。そのための組織をつくりたい」と、非常に気迫に満ちた言葉でおっしゃいました。

「たいへんな話だな」と内心思いました。と同時に「本当に出来るのかな」との想いが、頭の中をよぎりました。私は先生に、すこし時間をいただきたいと考え、「先生、3年待ってください」と頼みました。先生は、ニコニコしながら、「わかった」と言ってくださいました。わたしは、「しめしめ。先生はそのうちにお忘れになるだろう」と安心して、事務所を出ました。そのままわたしは、お約束したことを忘れていました。

3年が過ぎたころ、宮本先生からまた電話をいただきました。先生の記憶力の良さと、「どうしても名匠の会をつくる」という執念を感じました。わたしは、「もう、会を立ち上げるしかない」と感じ、「まな板の鯉」の心境になったのを覚えております。

「幅広くいろいろな業種の人たちを集めて会をつくろう」と、先生と話しました。「会長は誰にしよう。顧問は誰々に・・・」。先生は、組織をすべて網羅しているように、スラスラとお話しくださいました。お名前は存じていても、お目にかかったことのない方々でした。何回か打ち合わせをする中で、当時、先生の事務所にいらした溝端利一さんにも人選や準備に加わっていただくことになりました。

長野県全体を見渡して、どこかの地域に片寄ることなく、多くの匠を集めるのは、たいへんな苦労でした。「絶対に、匠の会をつくる」という宮本先生の強い意志が、全国で初めての「名匠会」を信州に誕生させてのだと思います。

会が発足してから20数年を経ています。これからも宮本先生の意志を継いで、今まで以上に、「信州名匠会」を発展させていくことが、わたしたちの使命であると思います。みなさん、これからも末永く、がんばりましょう。

平成6年11月、松本市で開かれた「すまいとまちづくりフェア」にて。村越久子氏、宮本会長、坂田守夫氏。

平成16年9月の研修会で会員に語りかける宮本氏

宮本先生追悼文

信州名匠会理事・有限会社エヌ設計　西澤　嘉雄

恩師、宮本先生の突然の訃報に、寂しさが込み上げる日でありました。

私が事務所に入社したのは、昭和47年、長野ダイヤモンドビルからです。隣地に長野市役所・市民会館があり、この9階建てビルも先生の作品。感激でいっぱいの職場環境でした。

事務所は公共建築の仕事が多く、先生のチェックが入った先輩の手書き図面を、丁寧に、かつ、先輩の癖に合せて訂正をする。消しゴムと鉛筆との格闘の日々。残業、徹夜の毎日。昼は現場、夜は図面描き、体力勝負そのものでした。

先生との会話はいつも所長車の運転中です。力強い励ましの言葉をいただき、そのおかげで、今日の自分の「建築の道」が築かれたのだと思います。

入社から10年が過ぎたころ、長野市立博物館が完成し、小布施の町並み修景事業も進み、所員も30名に増えました。事務所は、リンゴ畑の広がる郊外地の柳原に移り、思いもよらぬ環境の変化となりました。

先生は、緑薫る大地に草のように強く根を張り、建築を学ぶ、生きる舎であれと、「緑艸舎(りょくそう)」と命名されました。

平成5年、東京都大田区にあった小林古径画伯の旧邸が解体され、平成10年から3年間にわたり新潟県上越市高田公園内に復原整備工事を行った。平成12年、母屋竣工時、携わった大林組の職人さんとの記念写真。

平成13年春、村越久子氏の雪しろ窯で開かれた信州名匠会の陶芸教室にて。

社屋建設の計画は、雪深い飯山で由緒ある川口家（築100年以上）移築であり、アトリエとしてどう組み合わせ再利用するか、思考・打合せを重ね、1階事務所を高基礎に見せ、2階を古民家で覆い、地域の原風景にと発想されました。

解体してみないとわからない部分が多数あり、内心不安の中、作業を進めましたが、見事に解体でき、使えるものと使えないものを綿密に調べ上げ、1階の工事と共に加工に入りました。上棟時には、先生のイメージが形となり、善光寺平の山並みに調和し見事な原風景の建ち上げとなりました。

木部の洗い・塗壁・建具補修に入ると、木部が光り輝き、日本文化の空間美が見事に生き返り、さらなる寿命を得ることができ、緑艸舎は竣工しました。

これも設計者と職人の真剣なものづくり魂があってこそと、先生は完成の喜びを表しました。こうした職人の技・職人の輪の存在意義を、さらに確かなものとして継承しようと、先生は平成5年に「信州名匠会」と立ち上げました。

その後も、広島で中村外二棟梁と造り上げた「騰々亭」、熊本の木をピラミッド型に美しく組み上げた「物産館」、上越の吉田五十八設計「小林古径邸復原」、「坂城まちづくり」と、先生に叱られ叱られ築き上げ、ものづくりの基礎を一から学び、貴重な経験が強い自信につながり、独立後も宮本哲学を継承いたしております。

長年のご指導に感謝し、謹んで宮本先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

先生との出会いと教え

信州名匠会理事・建築工房アカシヤ　堀　誠

私が初めて宮本先生とお会いしたのは、平成5年4月26日の信州名匠会設立総会でした。

宮本先生をはじめ、村松貞次郎先生、降幡廣信先生、池田三四郎先生をはじめ、そうそうたる先生方を前に緊張を覚えたこと、そして宮本先生からお声をかけていただいたことを、昨日のことように思い出します。当日のご挨拶の中で宮本先生は、信州独自の建築技術の伝承・後継者の育成について穏やかな口調で語られました。私も大工として、名匠会を通じ修学を重ねたいと改めて感じました。

平成5年の秋、「和風建築探求の旅」を先生とご一緒したことは今でも心に深く残ります。先生と降幡先生のお二人のご案内で、園城寺、西教寺、西本願寺の飛雲閣、松下真々庵、曼殊院の八窓軒茶室を見学しました。また、数奇屋建築の中村外二棟梁の手がけた建物や棟梁の工作場へも案内していただきました。行く先々で精力的に見聞され、そして説明される先生がとても印象的で、大変貴重で有意義な旅行でした。

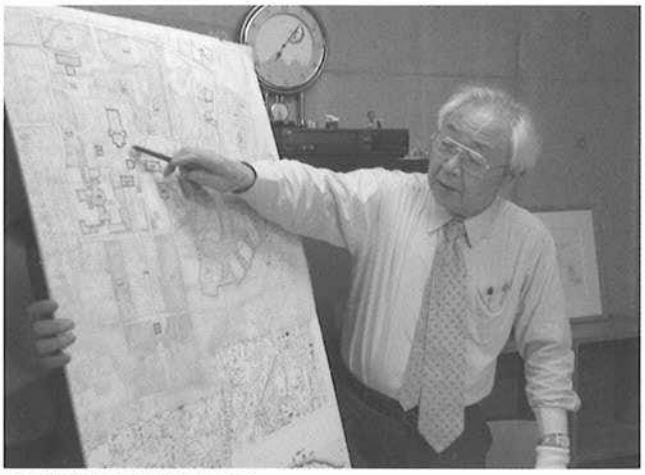
緑艸舎2階での例会で学ぶ堀氏（右端）

毎月、緑艸舎の2階で行われる例会では、先生のお話を拝聴できることが楽しみで、出席を続けてまいりました。先生の仕事に対する姿勢、取り分けて先生が職人衆の話を聴かれるときの姿勢が、ひとつの建物すべてに目が行き届く名棟梁のように、私には映りました。

個人的にうなぎ店にお招きした際に、仕事から離れた先生のお人柄に触れながらゆっくりお話しできたこと、それはまさしく最高の至福の時間に思えたものです。向き合っていただいたそのひとつひとつが、先生からの教えとして私の内に残ります。

宮本先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

合掌



平成15年7月の研修会にて

宮本忠長名誉会長を偲んで

信州名匠事務局長・宮本忠長建築設計事務所　西澤　広智

宮本名誉会長はここ約5年間、信州名匠会の研修会・通常総会に直接出席することはできませんでした。事務所所員以外とはあまり会いたがらなかったのですが、信州名匠会の理事会や研修会でのテレビ電話には対応してくださいました。そして、私に「みなさん、がんばっているようだね」「みなさんによろしく」と、いつもおっしゃっていました。

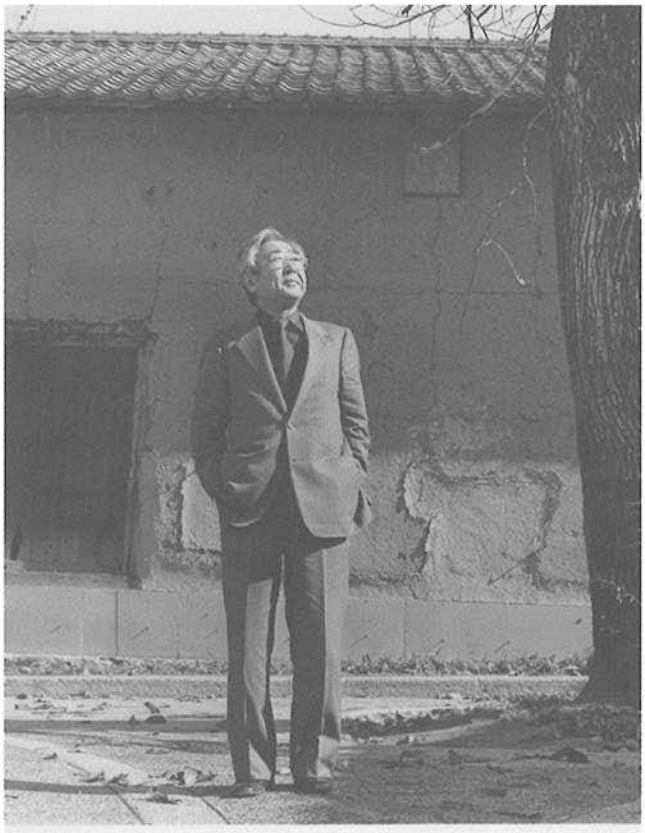
昨年の12月末まで所員との打ち合わせを行い、生涯現役を貫かれました。年末から体調をくずし、2月、私がお見舞いに行く予定の前の日に、家族に見守られる中、安らかに永久の眠りにつかれました。

宮本名誉会長はいつも、「我々は全国区でいなければいけない」とおっしゃっていました。

私は幸運にも、宮本名誉会長のライフワークとなった、小布施の町づくりの仕事の担当者として、長年にわたり関わらせていただきました。地域の気候・風土・歴史・文化を読み取り、向こう三間両隣の関係性を考え、建物が主役ではなく「間の空間」環境が主役ということを教えられ、社会にも発信し続けました。

地方都市に本籍地を置きながら、これだけ全国に影響力のあった建築家はいないでしょう。我々の誇りです。その宮本名誉会長と仕事を共に出来、いろいろな経験をさせていただいたことに、心から感謝いたします。

心より冥福をお祈り申し上げます。



小布施「幟の広場」にたたずむ宮本忠長氏

会員動向（平成27年6月～平成28年5月。敬称略）

■入会　個人会員■　林　正道／林工務店／大工／上田市古安曽2675-1／0268-38-1230
小宮山　吉登／(株)倉橋英太郎建築設計事務所／松本市野溝木工1-1-30／0263-26-6765
宮原　博一／(株)五明／塗装／長野市西和田1-11-46／026-241-1771
賛助会員■　星川　嘉諒／征矢野建材(株)／木材製材・加工・販売／松本市笹賀7116-1／0263-86-0250

■担当者の変更　賛助会員■　松田・南信(株)　　前任)高木　茂実　　新任)本澤　篤

■退会　個人会員■　宮川　裕行／三ツ友建築企画／設計
合屋　達三／(株)ミツルヤ製作所／家具
畔上　正／(株)五明／塗装

平成27年度研修旅行「栃木・福島の旅」

隈研吾建築探訪と歴史の町・会津と大内宿

信州名匠会　平成27年度研修旅行は、11月7日・8日に21名が参加して行われた。初日は栃木県内を巡り、東京オリンピック国立競技場の設計者にも選ばれた隈研吾氏の作品（ちょっ蔵広場・馬頭広重美術館・石の美術館）を堪能。2日目は、会津西街道の宿場町として栄え、江戸時代の面影を残す茅葺屋根の町並を満喫し、会津の明治・大正期に建築され趣ある渋川問屋座敷蔵で昼食。歴史的建物が多く残る会津若松を散策し、新旧の建物の魅力・それぞれの時代のたくみの感性・知恵を感じ親睦・研鑽の旅を楽しく終えた。

馬頭広重美術館にて

石・木材、地場の素材を生かした斬新な隈建築に感嘆

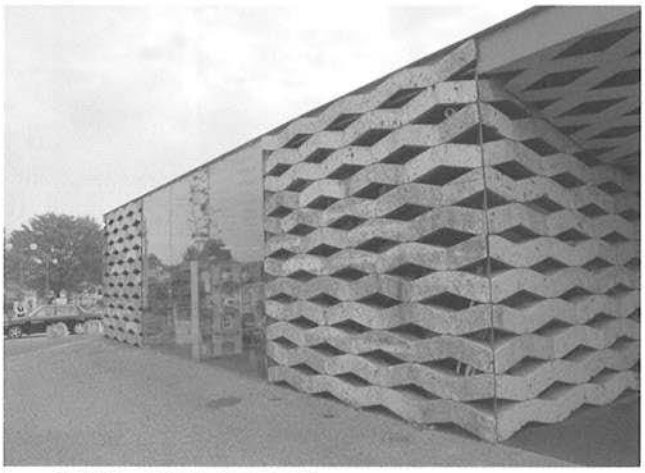
地域に残る大谷石を積んでつくった古い石蔵を保存。それを核としながら、コミュニティー活動の中心となる新しい駅前広場を創造した高根沢町の「ちょっ蔵広場」を、NPOのメンバーである寺田氏の案内で見学した。解体した石蔵の大谷石を再利用し、鉄骨を組み合わせたユニークな構造システムにより、透明感ある新鮮で魅力的な石の建築を生み出していた。米蔵を活かした計画ということで、床に米のもみ殻入りのゴムチップが採用されたエピソード等も紹介された。

次に訪れた那珂川町「馬頭広重美術館」は、隈研吾氏の出世作であり、期待を持って見学した。美術館内のレストランで食事を済ませたあと、学芸員の内山氏に施設の説明をしていただいた。広重の芸術と伝統を表現する伝統的で落ち着きのある大らかな外観で、美術館全体は、地場産の八溝杉による木格子（ルーバー）に包まれ、時間と共に映りゆく光の影がさまざまな表情を見せ、魅力的な空間を創出していた。壁には鳥山和紙、床には芦野石と地場の材料にとことんこだわっていた。

初日の最後は、白河市の「石の美術館」と「那須歴史探訪館」を見学した。この美術館の所有者でもある白井石材の菊池氏に建物や石材についての説明をしていただいた。栃木県の芦野石、福島県の白河石をふんだんに使って、石に関する様々な試みに挑戦し、石づくりの新しい世界を表現し、石・光・水、そして保存利用された古い石蔵が、静寂で魅力的な空間を作り出していた。

まる一日、隈建築を満喫し、芦の牧温泉、大川荘に宿泊。紅葉を愛でながら大川渓谷を望む棚田露天風呂にゆっくり浸かり、旅の疲れを落とし、すばらしい温泉を満喫した。

馬頭広重美術館の内部から庭園を望む



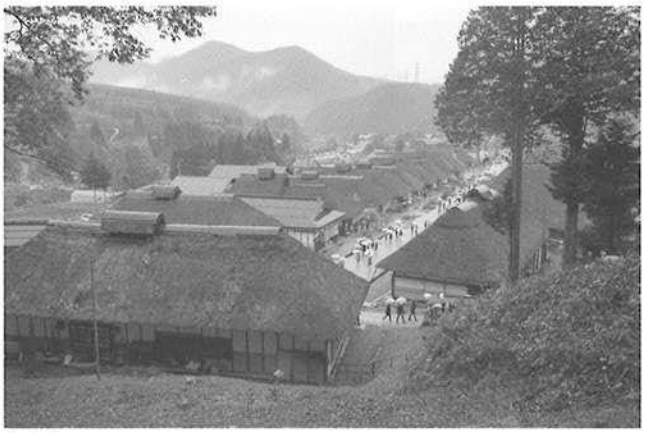
ちょっ蔵広場。大谷石とガラスの対比

研修旅行スナップ

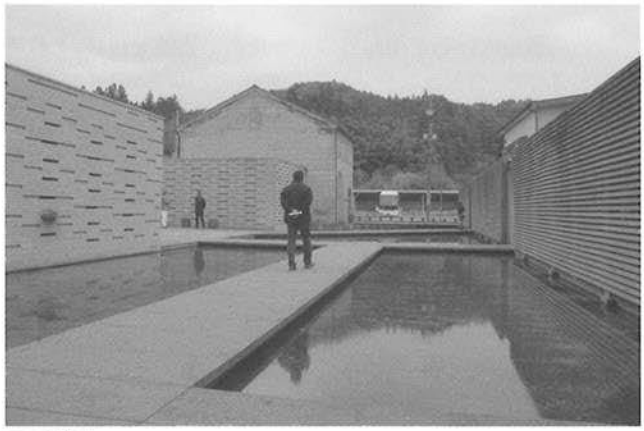
２日目は、朝一番で、景勝地「塔のへつり」で、奇岩怪石と紅葉が織りなす渓谷美を鑑賞。若干天候が心配されたが何とか持ちこたえ、江戸時代にタイムスリップしたような、大内宿、そして、歴史的建物が多く残る会津若松七日町通りを、めいめい自由行動で楽しんだ。

石の美術館にて

高根沢駅にて



大内宿



石の美術館

研修旅行日程

11月7日（土） 須坂山二駐車場 ――（上信越道・関越道・北関東道）――ちょっ蔵広場 ―― 馬頭広重美術館（館内レストランにて昼食）―― 石の美術館 - 芦ノ牧温泉（泊）

11月8日（日） 塔のへつり - 大内宿 - 渋川問屋（昼食）―― 七日町通り ―― 磐越道・北陸道・上信越道）―― 須坂山二駐車場

平成27年度研修旅行「「栃木・福島の旅」参加者名簿（21名。氏名・所属。順不同、敬称略）

五明良平・夫人・（株）五明／坂田守夫・坂田工業（株）／鎌倉良収・（株）鎌倉木材／小坂浩一・小坂建設（株）／笠原佑晃・夫人・（株）二見屋／白石大陸・サンコー特機（株）／犬飼栄治・（株）シナノ大理石／黒澤忠・クロサワメタル（株）／荒井孝明・（株）本久／高木茂実・松田・南信（株）／米田満・（株）山二／堀誠・建築工房アカシア／祢津吉道・（株）ミツルヤ製作所／増田幸雄・匠建設（株）／岩井秀樹・岩井工業（株）／北村英彦・（株）綿内瓦工業／西澤広智・（株）宮本忠長建築設計事務所／中村明穂・宮本夏樹・信州名匠会事務局

定例研修会●Report

（平成27年11月～平成28年4月）

平成27年度　第4回研修会
信州名匠会リレートーク VOL.9
【岩野商会2氏が内装（内装下地・仕上工事）を解説】

平成27年12月16日（水）
宮本忠長建築設計事務所
プレゼンター：鳥羽　秀和氏（(株)岩野商会）
　　保科　章良氏（(株)岩野商会）
参加者：17名

壁と天井の施工について説明する鳥羽氏

鳥羽氏は、内装工事のうち、タイル張りなど床の仕上げ工事について解説。良い仕上げにするため「下地の湿気対策に注意を払っている」とし、墨出しをして中央から張っていく施工方法についてもスライドを交えて紹介した。「強い太陽光が差し込むもとでタイル張りの作業をしていたら、後で縮んで目すかし状態になってしまい、あわててやり直した」など昔の失敗談も披露して、笑いを誘った。「最近はウッドタイルがはやっている」と製品のトレンドも紹介した。

保科氏は、壁と天井の施工について説明。耐火や耐震、遮音といったJIS製品を中心とする材料の性能について話した後で、鋼製野縁で下地をつくってボードを固定していく施工の流れを紹介した。また、地震災害などで天井の落下被害があったことから、特に公共建築などで要求される耐震天井については「専門の講習会を受けた人が施工するようにして、設計者に確認しながら作業を進めるように気をつけている」と話していた。

平成 27年度
【新年会】

平成28年1月20日
ホテル犀北館
参加者：32名

毎年恒例となった信州名匠会新年会が犀北館で行われ、会員同士が親睦を図り、一年の抱負を語りあった。土本俊和会長は年頭のあいさつで、「若者の育成」について語られた。「成果は結果を見がちであるが、途中の心の持ち方、完成したときの心の豊かさも大事である。今年は心の育成にも力をいれてはどうか」と今年の展望を訴えられた。

降幡副会長は乾杯のあいさつで、「建築家の村野藤吾先生は93歳まで現役であった。私も生涯、元気で現役をつとめたい」と語り、和やかな懇親会が始まった。

征矢野建材（株）の星川嘉諒氏、林工務店の林正道氏が新たに当会に入会された。星川氏は「県産材を県外へ広めていきたい」と強く語られた。林氏が代表を務める林工務店は流行の工法ではなく、伝統的な工法を得意とする工務店である。両者も地域に根づいた職人の会である当会を盛り上げてくれることに期待。今年もまた、今後の研修会に期待しながら、明るく和やかな新年会となった。

平成 27年度　第 5回研修会
信州名匠会リレートーク VOL.10
【「大きなものだからこそ細かく」金属加工を語る】

平成28年2月25日（木）
宮本忠長建築設計事務所
プレゼンター：黒澤　忠氏（クロサワメタル（株））
参加者：22名

金属加工を語る黒澤氏

チタンやステンレス、アルミなどの金属を使い、パネルやカーテンウォールなどを扱うクロサワメタル（上田市）会長の黒澤忠氏に、金属加工や金属パネルの施工技術について、その技を伺った。

黒澤氏は、自身が手がけたモニュメントや建築物のサッシなどを紹介しながら解説。金属ならではの苦労として、工場でつくった大型のパネルが輸送時に車に載り切らなかったエピソードや、溶接を重ねる中で歪みなくつくる難しさなどを語り、「大きなものだからこそ、細かいところで気を使わなければいけない」と話した。

黒澤氏が記憶に残る仕事として上げたのは、隈研吾氏から依頼された軽井沢の建築に入れた窓枠や階段。「施工し、そこに名前が入ったことで、東京の仕事が多く入るようになった」と言い、「これ以来、軽井沢の物件の写真を見せると、技術的なところはフリーパスになった」と笑った。

黒澤氏は最後に「金属加工を依頼されるとき、できるだけノーと言わないようにしている。難しいものでも何とかやりようがある。ただ、そのためには例えば鍵などの金物がちゃんと動くように考えているのか、最終的にどういう形になるのかなど、設計者との間でコミュニケーションが重要」と話した。また「金属加工は一つひとつ手作業にするとコストがかかる。既製品をアレンジし、既製品ではないように見せることもテクニックで、何がなんでも自分たちでつくれば良いというものではない」と、匠ならではの金属加工のポイントを語った。

平成27年度　第6回研修会
信州名匠会リレートーク VOL.11
【木製家具を語る】

平成28年3月24日（木）
宮本忠長建築設計事務所
プレゼンター：中村 光敬氏（（有）中村木工所）
参加者：21名

木製建具の材料サンプルを手渡ししながら解説する中村氏（奥）。

中村木工所の中村光敬氏は、そもそも建具とはどういうものか、特性の異なる多彩な材をサンプルとして参加者に触れてもらいながら、木製建具職人の仕事を語った。

建具とは、建物の開口の仕切りで「動くもの」であり、一般的に建物の中で建具以外に動くものはない。つまり、それだけ建具は丈夫で、かつ正確で精密な製作が求められるという。建具の機能としては、出入り口（ドア・襖）・通風（網戸、葦戸（関西で良く用いられ、萩や竹のものが多い））・遮音・防火・防犯・装飾といったものが挙げられる。次に木製建具の材料として、中村氏にサンプルを回してもらい解説してもらった。ヒノキ・ヒバ・スギ・スプルース・マツ・タモ・ナラ等々、それぞれどのような使い方が適しているか、堅いか柔らかいか、水に強いか弱いか、実際に木に触れながら様々な特性を感じ取ることができた。

建具材は精度の高い製作技術が求められるため、材料も狂わない質の良いものが必要で、価格は一般的な建材の10倍にもなる。昔の建具材は高さ175cmが標準だったが、現在はサッシ高さに合わせて大きくなってきており、大きくなればそれだけ材料に求められる質、要求される製作技術が高くなる。中村氏は「（要求される精度が高ければ）なおさら気をつけなければならない」と、まさに職人としての心遣いを語ってくれた。

中村氏は松本市で実際にあった事例と共に、木表と木裏について説明した。それはある学校の机にカラマツを材料として用いたのだが、ササクレが出てしまい、その後カラマツは使用禁止になってしまったというエピソードだった。原因は材ではなく、木裏を机の表に用いてしまったからだと中村氏は語る。木裏はササクレし易いという特性があり、工業製品として製作すると、木表と木裏を分けることが難しい。建具製作においても木表・木裏の概念は重要で、これを誤ると反りが大きくなって建具が狂ってしまう。

また製作において重要なのが、建具寸法である。伝統建築の建具寸法がどう決まっていたか。それは江戸時代初期の建築を受け持つ作事奉行の配下に甲良家と平内（へいのうち）家が代々世襲しており、この平内家が「匠明」を代々伝えてきたのである。匠明は木割書の原本ともいえるもので、各種の建物の設計方法や材料の揃え方、各部位の寸法比率を定めて基本部材の寸法を元に計算できるようにした指南書だ。他にも吉田五十八氏の建築では、障子の割で天井高さを決めていたというものもある。

そして、建具は機能性ばかりではない。技巧の粋を尽くした精緻な装飾を施した欄間や格子、その技術の高さを生かした工芸品など、芸術的な美を感じさせてくれるものがある。それゆえ、飾り格子などはサンプルを作ることが難しく、作るための道具が必要になるため、取り返しがきかないと語った。

平成27年度　第7回研修会
松代―新御殿・旧文武学校見学・お花見・陶芸教室

平成28年4月16日
講師：西澤嘉雄氏（（有）N設計所長）
参加者：17名

松代城址公園にて記念撮影

旧真田邸を見学

松代にて、恒例の花見を兼ねた見学会・親睦会を行った。「真田丸」にちなんでの、真田大博覧会開催中の真田邸（新御殿）・旧文武学校を見学。伝統建築の耐震補強方法等について意見しながら、保存修復を終えた建物をじっくり鑑賞した。その後、天気にも恵まれ、花まつりイベントでにぎわうお祭り広場で、松代の伝統芸能をバックに、お花見弁当をいただきながら、和やかなひと時を過ごした。

陶芸教室

午後は、松代焼の松代陶苑に移動し、陶芸教室を行った。毎年お花見と陶芸教室でお世話になった故・村越久子先生へ思いを馳せながら、各々1kgの粘土をもとに約2時間、土と格闘。茶碗、湯のみ、お皿等、個性豊かな作品作りに集中した。松代焼の独特の風合いに焼きあがった作品が展示される総会が楽しみである。

たくみ No.038 信州名匠会ニュース
発行日：平成28年6月23日
発行者：信州名匠会　会長　土本　俊和
編集者：信州名匠会事務局
制作協力：文屋
連絡先：（株）宮本忠長建築設計事務所
事務局：西澤広智・宮本夏樹・中村明穂・酒井真一・吉田雅彦・木下豊
〒381-0012 長野市柳原 1875-1
TEL：026-241-5510 FAX：026-243-0187
http://www.meisyokai.com